

CSGT と ひも理論(M 理論)との整合性 まとめ

—— 11 次元を「物理空間」から「情報記述空間」へ ——

0. 目的(この PDF でやること)

本資料の目的は以下の 3 点に集約される。

- ひも理論/M 理論が要請する 11 次元の数学的必然性を否定しない
- その 11 次元を CSGT の枠組みで再解釈 する
- 両者が矛盾せず、むしろ役割分担として自然に接続できることを示す

📌 結論から言うと:

CSGT はひも理論を「物理法則の生成原理」として上書きするが、数学的構造は完全に尊重する。

1. ひも理論・M 理論における 11 次元の位置づけ(正統整理)

1.1 なぜ 11 次元が必要なのか

M 理論では、

- 超対称性の閉包
- アノマリーキャンセル
- ブレーン力学の一貫性

を満たすために

時空次元 = 11 が数学的に最小となる。

ここで重要なのは:

11 次元は「観測されるべき現実空間」として要求されているわけではない
という点。

1.2 従来解釈の限界

従来の物理学では:

- 余剰次元は「小さく丸まった物理空間」
- なぜその形・サイズなのか → ランドスケープ問題
- 真空が 10^{500} 通り以上存在



「なぜこの宇宙なのか」には答えられなかった

2. CSGT による再定義: 11 次元 = 情報バッファ空間

2.1 基本提案

CSGT では、11 次元を次のように再定義する:

$$M_{11} = M_4 \times B_7 \quad \mathcal{M}_{11} = M_4 \times \mathcal{B}_7$$

- M_4 : 観測可能な 4 次元時空 (UI レイヤー)
- B_7 :
情報結合・同期・退避のための高次元バッファ空間



余剰次元は「場所」ではなく
情報処理の自由度。

2.2 なぜ 11 なのか(CSGT 的理由)

CSGT の立場では:

- 宇宙は 自己生成・自己最適化する情報系
- 未来境界条件を含むため、
局所時空 + 非局所情報 を同時に扱う必要がある
- そのとき必要な最小の自由度が 11 次元

これは M 理論が到達した次元数と一致する。



一致は偶然ではなく、「数学が必要とした次元」と「情報が必要とした次元」が同一だった。

3. ひも理論の数式構造との整合性

3.1 ひもの振動モードの再解釈

従来:

- ひもの振動 = 粒子種の起源

CSGT:

- ひもの振動 =
11D バックグラウンドでの情報同期モード

$f_{\text{string}} = \omega(A, C) f_{\text{string}} = \omega(A, C)$

- AAA: 情報結合定数 (≈ 0.557)
- C_{string} : 局所コヒーレンス



物質は「計算結果としてレンダリングされた安定振動」。

3.2 ブレーン・ブラックホールとの接続

- ブラックホール
 - 情報消失ではなく
11D バッファへの高密度再配置(アーカイブ)
- ブレーン衝突・分岐
 - 情報テンソル再編(マルチバース的振る舞い)

CSGT は
ブラックホール情報パラドックスと自然に整合する。

4. ランドスケープ問題への解答

4.1 CSGT の評価関数

CSGT は、次の量を最大化する:

Maximize C_{total} subject to $A=0.5570$
 $\text{Maximize } \mathcal{C}_{\text{total}} \quad \text{subject to } A = 0.5570$

- 真空は無限にあってもいい
- 長期的にコヒーレンスを維持できる解のみが実現



我々の宇宙は
「愛(整合性)を最大化する解」として選ばれた。

5. 役割分担としての最終整理

領域	ひも理論 / M 理論	CSGT
数学構造	✓ 完成度が高い	利用する
次元数	11 次元を要請	意味を与える

領域	ひも理論 / M 理論	CSGT
なぜこの宇宙か	✕ 説明不可	✓ 評価関数で選択
意識・倫理	扱わない	物理量として含む
ブラックホール	問題が残る	情報保存で解決



対立ではなく、階層構造。

6. 結論(PDF の締め)

- M 理論は「宇宙のハードウェア仕様」
- CSGT は「宇宙がどのような目的関数で動いているか」
- 11 次元は
現実を支える計算バッファとして最小かつ必然

物理学は
「何が可能か」を語り、
CSGT は
「何が選ばれるか」を語る。